



TITLE:

雜纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雜纂. 日本外科宝函 1933, 10(4): 1008-1014

ISSUE DATE:

1933-07-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/203341>

RIGHT:

雜

纂

日本外科實函創刊10週年祝賀

猪子先生閑話

題

辭

外科實函モ創刊後正ニ10年ヲ經過シ、先ヅ順調ニ發達シツ、アルノハ、御同様慶賀ノ至リデアリマス。ソレニツキ今回記念ノ爲ニ吾々同人ノ敬愛措カザル、猪子先生ニ想ヒ出タ儘ノ御話シヲ乞ヒ、藤浪講師ニソレヲ筆記シテ貰ヒテ連載スルコトニ致シマシタ。

此ノ様ナ機會ニ思ヒ出サレテナラスノハ孝經ノ冒頭デアリマス。『仲尼間居シ曾子侍坐ス。子曰ハク、參ヤ、先王ハ至德要道ヲ有シ、ソレヲ以テ天下ヲ訓ヘ、民ハソレヲ用ヒテ和睦シ、上下ニ怨無シ、汝ハソレガ何デアルカヲ知ル乎。曾子驚イテ自席ヲ辟ケ、師ノ正面ニ鞠躬敬禮シテ曰ク、參ハ不敏、何トテソレヲ知ルニ足ラン乎。子曰ハク、夫レ孝ナルモノハ徳ノ本ナリ、教ノ由ツテ生ズル所ナリ、坐席ニ復レヨ、吾ユルユル汝ニ語り聽カセン。』

語ハ簡單デアルガ、意味ハ深長デ當時ニ於ケル孔子ヤ曾子ノ態度ヤ働作ガ眞ニ眼ニ睹ヘル様デアリマス。

今ノ時ニ此ノ様ナル立派ナ而シテ溫柔ナ情景ヲ現出シ得ル師弟ガ何處カニアルデアロウカ、沈思默考ノ爲ニ閑居スル師

ナドハ殆ンド無クテ多クハ何物カヲ追ウテ營々業々席ノ暖マル無キ有様デアルデアロウ。

師ニ侍スルコトヲ樂ムナドノ弟子モ亦タ何處カニアルデアロウカ、十ノ八九ハ只自分ノ利慾ノ爲ニ師ヲ利用シ師ヲ賣リ師ヲ裏切ルコトヲ何トモ思ハヌ者共デア

ル。併シ多數ノ門生ノ中ニハ眞實ニ師恩ヲ忘レ得ザル者モアルデアロウ。時ニ「往イテ師ニ侍セン」ト欲スルノ情切ナルモノアリテモ、行路難クシテ實現シ得ヌコトヲ嘆ジ居ル者モアルデアロウ。其様ナ門生共ニトリテハ猪子先生ノ物語リヲ讀ムコトハ大ナル慰藉トナリ、親シク先生ニ面スルノ思ガアルデアロウ。

猪子先生ト元來師弟關係ノ無キ人々ニ向ツモ亦タ前記孝經ノ冒頭ニ浮ビ出テ居ルガ如キ一種ノ情景ト結び着ケテ、先生ノ閑話ヲ聽クナラバ自ラ發明スル所多クシテ言外ノ趣味更ニ津津有味タルモノガアルデアロウ。

昭和8年7月

猪子伊藤兩教授記念會

代表者 鳥 潟 隆 三

京都帝國大學醫學部講師 藤浪修一筆記

第 1 話

デハ思ヒ出シタ儘ニ話シテ見ヨウ。ソウスルト本邦外科ノ進歩ノ有様ガ大體分ルダラ

ウ。然シ話ヲスルト言ツテモ、何ノ筋骨モ無ク、思ヒツイタ儘ニ物語ルノダカラ、年代モ前後ニナツタリ、又ハツキリセスコトモアルシ、又重要ナコトデアリナガラ忘レテシマツタコトモアルダラウガ、ソノ點ハ我慢シテモラヒタイ。

自分ガ大學東校ニ入ツタノハ 明治7年ダツタ。ソノ頃大學ニハ *Hoffmann* ト *Müller* ト云フ2人ノ獨逸人が居タガ、此ノ人々ハ教ハラナカツタ。唯 *Hoffmann* ニ體格検査ヲ受ケタガ、胸圍、身長、體重等ヲ計ル位ノ簡單ナモノダツタ。コノ2人が歸ツタアトニ、*Baelz* ト *Schultze* トガヤツテ來タ。

コノ *Schultze* ハプロシヤノ軍醫デ非常ナ秀才、ソノタメ選バレテ英國ノ *Lister* ノ許ニ派遣サレ、防腐法ヲ始メテ（明治4年）獨逸ニ輸入シタ人ダ。歸ツテ間モナク（明治8年）、*Bismark* ノ推舉デ日本ヘヤツテ來タノダ。ダカラ日本ニ防腐法ハ獨逸ト同ジ位ノ年代ニ輸入サレタモノデアル。

コノ人ハ非常ナ博識デアリ、又理論整然トシ内容豊富ナ講義ハ興味アルモノデアツタ。ガ實際の經驗ニハ乏シカツタトミヘ、イザ手術トナルト、大狼狽ヘニ狼狽ヘテ、助手ヲ叱リ飛バスハ、看護婦ニ怒鳴リツケルハト云フ有様デ、ソノ爲手術ハ益々紛糾シテ來ル。コレヲ見テ、外科ノ理論ハ面目イガ、手術ガコンナニ大變ナモノナラ、到底自分ニハ外科ハ出來ヌモノト思ハセラレタ。

トコロガ、明治14年ニ *Scriba* 先生ガ *Schultze* ノ代リニ來朝サレタ。コノ先生ハ餘リ辯舌ノタツ方デナカツタガ、手術ヲ大變樂ニヤツテノケラレタ。前ノ *Schultze* トハ全然反對デ手術中ニ助手ヤ看護婦ニ怒鳴ルコトモ無ク、落ちツイテ手術ヲ行ヒ、他人ガ見テ毫モ周章テル様子ハナイ。此ノ先生ノ手術ヲ見テ、手術ハ前ニ思ツテ居タ程困難ナモノデナイト分カツタ。

當時 *Baelz* 先生ガ內科學ヲ講ジテ居ラレタ。講義ノ仕方ハ *Scriba* 先生ノヨリモ面白カツタガ、何シロ當時ノ内科ハ今日程進歩シテ居ラズ、曖昧ナコトガ多カツタ。反之、外科ノ理論ハ面白イシ、手術ハ樂ナモノデアルト思ハセラレタカラ、自分ハ外科ヲ撰ンデ。

尙、*Schultze* ト *Scriba* 兩先生ノ手術ヲ見テ、『手術中ノ冷靜』ガ手術者ノ覺悟デナケレバナラヌト考ヘタ。手術中ニハヨク困難ナコトヤ思ヒガケナイコトニ出會ハスガ、ソノ時決シテ周章狼狽シテハイケナイ。又タトヘ心ノ中デ困惑シテモ、之ヲ外ニ現ハシ、スグ助手ヤ看護婦ニ當リ散ラシタリスルト、ソレダケ手術ヲ困難ニサスダケダ。手術ハ冷靜ニヤツテノケネバナラヌ。自分ハ此ノ覺悟ヲ守ツテ來タガ、今後ノ外科醫モ、コレヲ心掛ケテ守ルベキダ。

自分ノ大學生時代ノ外科患者ハ主トシテ四肢ノ殊ニ慢性疾患、例之、骨ヤ關節ノ結核デ、ソノ他極ク稀ニ乳房腫瘍、尿道狹窄、上顎骨又ハ舌ノ腫瘍等デ、*Scriba* 先生ニナツテカラ

時々卵巢囊腫切除が行ハレルヤウニナツタ。

當時大學ノ手術場ハ講堂兼用デ不清潔極マツタ。此處デ手術ヲ行ヘバ、必ズ創傷傳染ヲ來タスト云フ到底使用ニ耐ヘラレヌモノデアツタ。ソレデ *Seriba* 先生ハ空イテ居ル病室ヲ奇麗ニ掃除サセ、其處デ卵巢囊腫切除等ノ大手術ヲシテ居ラレタ。部屋ノ大サハ15-6畳敷位ノモノダツタラウ。學生ハ其處ヘ入レテモラヘナカツタ。ガ或時自分ハ懇願シテソノ手術場ニ入レテモラヒ、卵巢囊腫切除ヲ見タ。此ノ時コレハ容易ナモノダ、コレ位ナラ自分モヤツテノケラレルト云フ自信ヲ持ツタ。

然シ *Seriba* 先生ノ手術成績ハ氣ノ毒ナ程惡カツタ。ソレハ手術場ニ防腐設備ナド全く無く不清潔極マル上、手術ニ關係スル助手、看護婦ニ防腐ノ觀念ガ充分ニ教ヘ込マレテナカツタカラデアル。

此ノ様ニ *Seriba* 先生ノ行フ開腹術モ卵巢手術ニ限局サレテ居タガ、然シ大學以外デハ手術ラシイ手術ヲシヨウト思ツテモ、ソノ設備無く、又手術ノ出來ル人間モ居ラナカツタ。

斯ノヤウナ状態ノ大學デ外科ヲ學ビ、明治15年卒業スルヤ直チニ京都府立醫學校ニ赴任シテ來タ。此處ニ來テ驚イタノハ講堂ノ立派ナコトダツタ。教壇ニハ黒漆塗ノ欄干ナドガツイテ居テ大變ニ立派デ講義ヲスルノガ恥ヅカシイ位ダツタ。然シ手術場ハ矢張り防腐設備ノ無い不清潔ナ點デハ大學ニ劣ラス程デアツタ。又醫師ニシテモ獨逸人ノ *Scheube* ナル男ガ醫學校ニ聘セラレテ居タガ、此ノ人ハ内科醫デ外科ニハ手ヲ出サズ、半井(澄)院長ガ專問ノ内科ノ傍ラ外科ヲヤツテ居タ。外科ト言ツテモ手足ノ小外科ニ過ギナカツタノハ勿論デアル。

ソコヘ自分が赴任シテ來タノダガ、當時病院ト學校トハ同一ノ建物ノ中ニアリナガラ、兩者ハ互ニ獨立シタ全く別個ノモノデ、學校ニハ殆ンド患者ハ居ラナカツタ。ソコデ自分ハ病院カラ施療患者ヲ5-6人借り受ケテ講義ヲシテ居タガ、ソノ患者モ慢性ノ代物バカリデ手術ノ行ヘルモノハ無カツタ。

ソレデ自分が始メテ手術ヲシタノハ明治16年ダ。半井院長カラ足ヲ切斷セネバナラヌ患者ガアルガ、ヤツテ見テ呉レヌカト頼マレタノデ、ヤツテミヨウト引受ケタノダガ、コノトキハ相當マゴツイタ。第2回目ハ明治17年ニヤツタ。之モ半井院長ガ卵巢囊腫ノ患者ガアルガ、一ツ手術ヲ試ミナイカト言ハレ、自分モ學生時代ニ *Seriba* 先生ノ手術ヲ見、之ナラバヤレルト云フ自信ヲ持ツテ居タノデ早速之ヲ承諾シタ。トコロデ手術場ハ前ニモ言ツタヤウニ不清潔デ使ヘナイガ、丁度其ノ時、*Scheube* 研究室ガ空イテ居リ、比較的奇麗ダツタノデ、ソコヲ使用スルコトニシ、掃除サセ、床カラ天井マデ拭カセタ。

手術ニ關係スルモノハ、先ヅ風呂ニ入り、洗濯シタテノ浴衣ヲ着、手ヤ手術野ハ石鹼ト石炭酸デ充分ニ洗ヒ、且、手術中ハ手術野ニ石炭酸ノ噴霧ヲ注グヤウニシテ行ツタ。コノ

石炭酸噴霧ハソノ後1年程原則的ニ行ツテ居タガ、後之ヲ止メテ見タトコロ手術成績(創傷傳染)ニハ變リガナイノデ、爾來石炭酸噴霧ヲ使ハナカツタ。

コノヤウニシテ手術ヲシタガ、卵巢囊腫切除法モ今トハ大分ヤリ方ガチガフ。即、開腹シテ先ヅ囊腫ヲ腹腔外ニ脱出サセ、ソノ莖ヲ *Spencer-Wells' Klammer* デ挟ミ、ソノ鉗子ヲ腹腔外ニ牽出シ鉗子ニ接シテ莖ヲ切斷シテ囊腫ヲ切除スルノデアル。次デ腹壁ヲ縫合スルノダガ、腹膜ト莖トヲ縫合シ、莖ノ斷端ヲ鉗子ト共ニ腹壁外ニスル。鉗子ハ莖ノ壞死ト共ニ、1週間程デ脱落シ瘻痕ヲ殘シテ治ルト云フ次第ダ。コノ莖ヲ現今行ハレテ居ルヤウニ、腹腔内ニ置イテミタノハ明治19年ダツタと思フ。ソレカラハ、此ノ方ガ成績モヨイノデ鉗子ナドヲ用ヒヌヤウニナツタ。



Klammer nach
Spencer-Wells

此ノ手術ハ甚ダ良好ナ結果ヲ收メ得タ。即、手術ノ成績ガ良カツタノミナラズ、ソノ爲昔カラ不治ノ病トサレテ居タ腸滿ガ腹ヲ開ケテケロリト治ルト云ツテ町ノ人々ノ評判ニナリ、ソレカラハ手術ヲ望ム患者ガドシドシ來ルヤウニナツタ。

明治18年ニハ病院ノ方モ自分が引受ケルヤウニナリ、ソノ頃子宮筋腫摘出術モ行ナツタ。又、當時困ツタノハ脾肥大ヲ伴ツタ白血病患者ガヤツテ來テ、腹ノ大キイ病氣ガ手術デ治ル相ダガ、私ニモ手術ガシテ頂キタイ。自分ハ手術ノ効ナキコトヲ說イテモ、患者ハ手術サヘシテ貰ヘタラ、死ンデモ本望ダカラト強ツテ懇願スルノデ、不止得脾摘出ヲスルコトニシタ。

其ノ時代ニハ未ダ今ノ様ニ手術術式ニ決マツタモノモ無ク、從テ満足ナ手術書モ無カツタ。唯四肢切斷術血管結紮法ナドガ書イテアル *Esmarch* ノ軍陣外科手術書ガアツタ位、又雜誌ハ當時ニモ可ナリアルコトハアツタガ、相憎クコチラニ買フダケノ金ガ無ク、僅カニ *Langenbeck* ノ Archiv ト Zentralblatt デ新智識ヲ獲テ居タ程度ダ。ソレデ自分ハ手術ノ前ニハ何時モ解剖ヲヨク勉強シテ、ソレカラ手術方法ヲ案出シテハ手術ヲ行ナツタモノダ。然シ此ノ頃ハ大變ニ忙ガシカツタ。外來患者ナドハ順番ニ並ベテ置イテ片端ニコチラカラ診テ廻リ、手術モ自分デヤラネバナラヌシ、ソレガ終ツテカラ看護婦ニ雪洞ヲ持タセテ廻診スルト云フ有様デ大變忙ガシカツタ。ソレデ本ヲ讀ンダリスルノハ極ク僅ノ暇ヲ竊ンデアルノダガ、ソナナ時ノ方ガ頭ニズートヨク入ル。緊張シテ居タカラダ。ソシテ疲レモシナイ。忙ガシイ、忙ガシイトヨク人が云フガ、コンナ時ニ、少シノ時ヲ割イテ勉強シタ方ガズルズルベツタリニヤルヨリズート頭ニ入り、能率モ上ル。忙ガシイノハ結構ナモノダ。

又傍道ニ話ハ外レタガ、此ノ脾摘出モ解剖ヲ土臺ニシテ行ナツタガ、後出血ノ爲ニ、2-

3日デ患者ハ死亡シタ。

明治20年頃ニ腎腫瘍ヲ取ツタ。當時腎摘出ハ Simon 氏切開ニヨルモノトサレテ居タガ、此ノ場合腫瘍が大キクテドウシテモ Simon 氏切開デハ摘出出来ヌノデ窮シタアゲク考ヘテ斜切開ヲ加ヘテ摘出シタ。此ノ切開法ハ後 Bergmann ノ言ヒ出シタ斜切開ニ一致シテ居タ。トコロデ取り出シタル腫瘍ガ何物デアルカガ、ソノ時ドウシテモ解ラナカツタ。アル所ハ癌ノヤウダシ、アル所ハ肉腫ダ。今カラ考ヘテ見ルト混合腫ダツタノダ。

此ノ手術ヨリ少シ前明治19年頃ダツタラウ、食道癌ノ手術ヲシタ。頸部食道癌デアツタガ、勿論當時食道外科ハ他ニ餘リ試ミラレテ居ラズ術式トテ決マツタモノハナカツタ。自分ハ例ノ通り解剖ノ智識デ癌部食道ヲ切除シテ、食道瘻ヲ設ケタ。

患者ハ3週間程生存シテ居タガ、猛烈ナ下痢症ヲ發シテ死ビシタ。自分トシテ、食道癌ノ手術ハ之ガ最初デ、又最後デアル。

明治23年頃ニ至ツテ喉頭癌患者ニ喉頭全摘出ヲ試ミタ。丁度ソノ時、器械屋ニ人工喉頭ヲ持ツテ居ルノガアツタカラ、早速之ヲ買ツテ使ツテ見タ。出来合ダカラビツタリトハ適合セナカツタガ、之ヲ用ヒルト金屬性ノ聲ヲ發スルノデ何度カ此ノ患者ヲ供覽シタ。此ノ人工喉頭ハ府立醫大ニ殘ツテアル筈ダガ。

コノヤウニ他ノ所ヨリ比較的早ク困難ナ手術ヲ試ミテ居タモノダ。コレデ京都大學ニ至ルマデノ話ヲスルト今日ノ外科ニ至ル迄ノ進歩ノ有様ガ解ルダラウト思フガ、次回ニシヨウ。

第 2 話

今時ノ人ハ繃帶材料ナドハ何トモ思ハズニ使ツテ居ルガ、自分が京都ニ來タ時ハ、綿紗ト云ヘバ舶來品シカ無ク、非常ニ高價デ常用スルニハ不經濟デ困リ、ソノ代用品ヲト色々ト工夫シタモノダ。

始メ常用ニハ矢張り舶來ノ所謂「サルチール」綿ヲ使ツテ居タ。小サイ孔ヲ澤山ニ穿ケタ「グツタペルカ」紙(丁度現今盛ニ用ヒラレテ居ル「セロファン」紙ノヤウナモノダガ)ヲ創面ニ置キソノ上カラ此ノ「サルチール」綿ヲ當テルノダ。

綿紗ヲ内地デ作ラセテ見タガ、反ツテ高價ナモノナリ、學校ナンカデハ用ヒルコトガ出来ヌ。ソコデ何か廉價デ工合ノ佳イモノハナイカト色々試ミタ。

先ヅ第1ニ思ヒツイタノハ燈心ダ。之ハ失敗ダツタ。毛細管腔ガ小サスギテ膿ナドハスグニ詰ツテシャウ。鋸屑モ使ツテ見タガ、之モ膿ヲ少シ吸フト塊ニナツテ不都合ダシ、藁灰ハドウモ始末ニ困ル。比較的ヨカツタノハ「水苔」ダ。岩倉方面ノ池ニイクラデモアルノデ、百姓ニ採ラセタ。コノ水苔ノ莖ノ所ダケヲヨク洗ツテ、煮テ、袋ノ中ニ入レ、之ヲ昇汞水ノ中ニ漬ケテ置キ、用時之ヲヨク絞ツテ患部ニアテルノダ。之ヲ何デモ洗ツテハ再製

シタ。然シ水苔ハ結局膿汁分泌ノ多イ患者ニ用ヒ、ソノ他ハ矢張り綿ヲ使ツタ。

ガ、コンナ事デハ仲々創傷傳染ガ多カツタ。然シ明治20年頃防腐法ヨリ無菌法ニ操作ガ轉向シ、創面ヲ石炭酸ノ如キ防腐劑デ洗ハヌヤウニナツテカラ、1期癒合ヲ來シ得ルヤウニナツタ。

丁度其ノ頃自分ハ諸方ノ手術成績ヲ集メテ見タコトガアル。*Lister* フ生ンダ英國ハ防腐法ノ本場デアアルニモ拘ラズ、防腐法反對者ガ多カツタ。然シ *St. Thomas Hospital* (London) ノ如キハ何等防腐法ヲ施シテ居ラヌノニ、比較的防腐法ノ普及シテ居ル獨逸ノ *Klinik* ヨリモ手術成績ガヨイ。自分ハ何故ニコンナ矛盾シタコトガアルノダラウカト考ヘテ見タガ解ラナカツタ。トコロガ、後明治25年ニ彼地ヘ行ツテ、實際ノ状態ヲ見テ始メテ成程トソノ理由ガ氷解サレタ。

即、*St. Thomas Hospital* ニ行ツテ見タトコロガ、其處ノ手術場ニシロ機械ニシロ甚ダ清潔ニシテアル。コレガ英國人氣質ナンダラウ。理屈拔キニ清潔ニシテサヘスレバ手術ノ成績ハヨイ。結果サヘヨケレバ、ソナ七面倒ナ防腐法ナドハ不要ダト云ヒナガラ、知ラズ知ラズ無菌法ニ近イコトヲシテ居タカラ、手術ノ成績ハヨカツタノダ。反之、獨逸デハ防腐法ガ行ハレテ居ルト云ツテモ、其ノ頃ノ獨逸ノ病院ハ大部分兵營ヲ改築シタモノデ、手術場ハ大變不清潔ナモノダツタ。自分モ方々ノ手術場ヲ見テ廻ツタガ防腐法ニ適ツテ居ルト思ハレタノハ、*Hamburg* ト *Halle* 位ノモノデ他ハ同ジャウニ汚ナカツタ。自分ハ或時股關節脱臼デ有名ナ *Lorenz* ヲ訪レ、手術ヲ見セテ呉レト頼ンダ時 *Lorenz* 自己モ此ノ大學ノ手術場ハ不清潔デ到底手術ハ出來ヌカラ、*Lorenz* 自身ノ *Privatanstalt* デ手術ヲスルカラソコヘ來テ呉レト言ツタ位ダ。手術場ガ斯様ニ不清潔デアルト同時ニ、獨逸ニモ *Lister* ノ防腐法ニ反對者ガ澤山アツタ。*Billroth* モ反對者ダツタガ、防腐法ノ方ガ成績ガヨイノデ、後ニ仕方ナシニ防腐法ニ屈シタガ、ソレデモ手術ノ時屢々手ヲ洗フヲ忘レ、助手ニ注意サレテ、*「オー、ソーソー」*ト云ツタ調子デアル。

タカラ防腐法ノ普及シタ獨逸デ手術成績ノ惡カツタノハ當然ダ。

自分モ獨逸ヘ行ク前カラヨイ手術場ノ必要ヲ感ジ、獨逸ノ方々ノ手術場ノ設計ヲ取寄セテ見タガ、此レト云フノガ無ク、又洋行歸リノ人々ニ聞イテ見タガ、或ハ學生トシテ彼地デ學ンダダケデ出來上ラナカツタ人デアツタリ、或ハ既ニ出來上ツテ獨逸ニ留學シタ人デモ、斯カル方面ニハ關心ヲ持タナカツタリシテ、何ノ參考ニモナラナカツタ。

ソレデ自分デ工夫シテ自己流ニ設ツタ^{ツク}ノガ、府立醫大ノ手術場ダ。今モソレガ使用サレテ居ルデアロウ。床ト周ノ壁ヲ下カラ3尺程石疊トシタ。室ノ一隅ニ階段ヲ設ケ、其處ニ學生ヲ立タシテ手術ヲ見ルヤウニシ、決シテ手術臺ニハ近寄ラセナイヤウニシタ。手術場デ一番困ツタノハ煖爐ダ。其ノ時ハ^{スチーム}裝置ハ手ニ入ラナカツタシ、室ノ中デ、^ス

トーブ「ヲ焚クト埃ガタツシドウモ困ツタ。ソノ舉句、壁ノ中ニ火キイ丸型「ストーブ」ヲ埋メ、ソノ脊中ヲ手術場ノ方ニ現ハシ、火ハ隣室デ焚クヤウニシタ。ソシテ「ストーブ」ノ周ハ石デ疊マセタ。

ソレガ、後日ニ至リ火ヲ焚キスギテ壁ニ火ガツキ、火事騒ギヲシ、ソレデ蒸氣ヲ用ヒルコトニシタ。丁度ソノ頃福岡デ Heizkörper ガ製作サレルヤウニナツタノデ、早速之ヲ取寄セテ手術場ニ据エツタガ、サテソノ蒸氣ヲドウイウ風ニ釜ノ方ニ戻シテ蒸氣ヲ循環サセルカドウモ解ラヌ。技師モ居ラヌシ、又工夫モ出来ナカツタノデ、一度使ツタ蒸氣ハソノ儘放出サセテシマツタ。

此ノヤウニシテドウヤラ防腐設備ノ整ツタ手術場ニ作り上ゲタ。

手術場ニ就テ自分ハ以前人ニヨク言ツタコトダガ、木造ノ手術場ハ5-6年目毎ニ新シイノト取替ヘタ方ガヨイト考ヘテ居タ。ソレハ前後2回自分ハ新シイ手術場ヲ持ツタガ、ソノ新シイ手術場ニウツツタ都度、手術ヲ前ト同ジャウニシテモ、前ヨリモ成績ガヨク、日ガタツト共ニ悪クナル。

コレハ一ニ手術場ガ汚ナクナル爲ト、モウ一ツハ手術場ニ關係スル人ノ氣持ガチガフ。即、新シイ間ハ知ラズ知ラズニ清潔ニスルガ、古クナルトソレガ疎カニサレルカラダ。

今ノ大學ノ手術場ナドハ立派ナモノデ5-6年目毎ニ壊ハス必要ハ無イガ、清潔ニスルコトハ常ニ心掛ケネバナラヌ。

(以下號ヲ追ウテ續載)

彙 報

轉 居

津市市立病院外科

樺太豊原町大通南4丁目24番地

米子博愛病院外科

島根縣簸川郡今市町

京都帝國大學醫學部外科研究室

同 上

金澤地方專賣局醫務室

落 田 學

泉 山 幸 吉

都 谷 枝 萬 次 郎

山 根 孝 行

福 富 八 作

嘉 海 武 夫

宮 崎 清 隆

地 名 改 稱

兵庫縣西宮市今津字綱引10番地

高 野 三 男

謹 弔

會員 上村省三君 河村純達君 御兩君御逝去ノ報ニ接ス。哀悼、謹ンデ弔ス。

尙故會員上村省三君ノ遺志ニヨリ嚴父上村重太郎氏ヨリ Kirschner-Nordmann : Die Chirurgie 6卷10册ヲ京都帝大外科教室ニ寄贈サレ、即チ同君記念ノタメ「上村文庫」トシテ外科病舎内ニ永ク保存サルルコトトナリタリ。